

吟詠教本 和歌篇(下巻)

題	初句	作者	頁
夏の歌の中に	枝に洩る	京極為兼	2
海路の眺望を	浪の上に	京極為兼	4
夕の花を	花の上に	永福門院	6
秋の御歌に	真萩散る	永福門院	8
題しらず	いかにして	冷泉為相	10
嘉元百首歌に山家を	庵近き	冷泉為相	12
暮山雪	渡りかね	正 徹	14
露と落ち	露と落ち	豊臣秀吉	16
古郷月	里は荒れて	木下長嘯子	18
富士の山の歌あまた	ふじのねに	下河辺長流	20
鶯	なけやなけ	荷田春満	22
嵐	しなのなる	賀茂真淵	24
山ざくら	敷島の	本居宣長	26
櫻花三百首「あらたまの」	あらたまの	本居宣長	28
櫻花三百首「日ぐらしに」	日ぐらしに	本居宣長	30
霞中春雨	隅田川	橘 千蔭	32
うづまさにてひとりながめて	太秦の	小沢蘆庵	34
薄随風	ひとかたに	香川景樹	36
月よみの	月よみの	良 寛	38
憶ふ	草枕	良 寛	40
同じころ	世の中に	良 寛	42
このごろ出雲崎にて	たらちねの	良 寛	44
非常之変に立到り申し候	親思ふ	吉田松陰	46
身はたとひ	身はたとひ	吉田松陰	48
わが身ありとは	君が世を	梅田雲濱	50
春よみける歌の中に	すくすくと	橘 曙覧	52
人のあまたありて	赤裸の	橘 曙覧	54
獨樂吟	たのしみは	橘 曙覧	56
赤心報國	国を思ひ	橘 曙覧	58
晩の鐘	いつよりか	大隈言道	60
あかつき方に	をしからぬ	野村望東尼	62
山家	山里は	太田垣蓮月尼	64
富士	晴れてよし	山岡鐵舟	66
火に焼かれ	火に焼かれ	井上円了	68
萩寺にてよめる	萩寺の	落合直文	70
今朝の朝の	今朝の朝の	伊藤左千夫	72
くれなゐの	くれなゐの	正岡子規	74
夕顔の	夕顔の	正岡子規	76
毛越寺懷古	大門の	佐佐木信綱	78

吟詠教本 和歌篇(下巻)

題	初句	作者	頁
大和ぶり	ゆく秋の	佐佐木信綱	80
春	春ここに	佐佐木信綱	82
われ男の子	われ男の子	与謝野鉄幹	84
つけ捨てし	つけ捨てし	尾上柴舟	86
諏訪湖畔	みづうみの	島木赤彦	88
鉦鳴らし	鉦鳴らし	窪田空穂	90
鎌倉懐古	鎌倉の	窪田空穂	92
「恋衣」より金色の	金色の	与謝野晶子	96
「恋衣」より海恋し	海恋し	与謝野晶子	98
やは肌の	やは肌の	与謝野晶子	100
白埴の	白埴の	長塚 節	102
死にたまふ母「みちのくの」	みちのくの	斎藤茂吉	104
死にたまふ母「のど赤き」	のど赤き	斎藤茂吉	106
向日葵は	向日葵は	前田夕暮	108
春の鳥	春の鳥	北原白秋	110
指をもて	指をもて	土岐善麿	112
りんてん機	りんてん機	土岐善麿	114
中国を巡りて	幾山河	若山牧水	116
白鳥は	白鳥は	若山牧水	118
小諸懐古園にて	かたはらに	若山牧水	120
酒	しらたまの	若山牧水	122
心の鉦	今日もまた	若山牧水	124
夢	夢ならで	若山牧水	126
牡丹花は	牡丹花は	木下利玄	128
ふるさとの山	ふるさとの	石川啄木	130
こだま	ふるさとの	石川啄木	132
やはらかに	やはらかに	石川啄木	134
たはむれに	たはむれに	石川啄木	136
友がみな	友がみな	石川啄木	138
葵祭	地に落ちし	吉井 勇	140
吉野上市	ふるさとに	土屋文明	142
山水	真木ふかき	今井邦子	144